

Title	共同研究：観世元章の能楽改革（二）
Author(s)	
Citation	演劇学論叢. 2003, 6, p. 118-118
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/97536">https://doi.org/10.18910/97536</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

■共同研究

観世元章の能楽改革(二)

前号にひきつづき明和改正謡本を中心とした観世大夫元章の「能楽改革」と呼びうる営為の解明をめざした論考をここに掲載する。これらの論考が大学院の演習「観世大夫元章の能楽改革の総合的研究」を基盤にしていることは前回と同様である。この一年間の演習担当者とその対象曲は、長田あかね(海士)、茂山恭仁子(項羽)、中尾薫(求塚)、恵阪悟(道明寺)、小川佳世子(水無月祓)であり、そのほか元章の改革に関する単発の報告もあった。

また、この一年間のあいだには、また活字にはなっていないが、同演習参加者による明和改正謡本や観世元章についての研究成果がいくつか報告されている。その一は中尾薫氏の能楽学会大会(於早稲田大学)での研究発表「明和改正謡本と田安宗武―新作能(梅)と脇能をめぐって―」であり、その二はやはり中尾氏による六麓会(於神戸市勤労会館)での研究発表「田安家と明和改正謡本―田安家旧蔵版本番外謡本の書込みをめぐって―」であり、その三は橋場夕佳氏の芸能史研究会例会(於京都キャンパスプラザ)での研究発表「観世大夫元章と『習十番』―元章手沢本の書入をめぐって―」である。これらはそう遠くない将来に論考として活字化されるはずであるが、本号掲載の論考にこれらの研究発表をあわせてみる

と、開始後まる四年が経過した「観世大夫元章の能楽改革の総合的研究」の成果が、われわれの予想を大きくこえる形で着実にあらわれてきていることが知られる。たとえば、筆者などは、当初は演習の成果は一曲ごとの検討という形でまとめられるものと考えていたのだが、ご覧のように、今号掲載の論考や右に紹介した口頭発表に明らかになように、その視点や問題意識はもはや一曲だけに限定されることなく、また、その対象も能の詞章や演出の改訂の実態究明だけでなく、その背後にある当時の古典研究や元章をめぐる人的関係にまでおよぼうとしている。今後、この共同研究がどのような展開をみせてゆくかはまだ不明であるが、いずれにせよ明和改正謡本に集約された観世元章の試みが能楽史上の一大事業であり、それが江戸時代後期の文化的状況と密接にかかわり、なおかつその影響は観世流だけでなく一部は能楽全体にまでおよぶていのものである、というていどの輪郭はみえてきたのではないかと思う。かつての共同研究「能の演出史研究」は二回の掲載で終わったが、こちらのほうはもうしばらく掲載を継続する必要があると思うのである。

(天野文雄)

〔前号掲載文〕

明和改正謡本における「伊勢物語」関係曲……………橋場 夕佳  
―新註との関係を中心に―

観世元章の《鉄輪》……………中尾 薫  
―明和改正の実態とその影響―

明和の改正と「三読物」関係曲の演出……………天野 文雄  
―《安宅》《正尊》《木曾》の小書などをめぐって―